

「世界自然遺産候補地に関する検討会」における大雪山の評価について

以下の資料は、平成 15 年 3～5 月に開催された「世界自然遺産候補地に関する検討会」の報道発表資料及び議事録より、大雪山に関連する部分を抜粋したものである。

■ 最終検討会（平成 15 年 5 月 26 日）終了後報道発表資料

世界自然遺産候補地に関する検討会について

平成 15 年 5 月 26 日（月）

世界自然遺産候補地に関する検討会

座長 岩槻邦男

（検討会の議論の経過）

当検討会では、3 月 3 日（月）から本日まで、これまで 4 回にわたって世界自然遺産の候補地に関する検討を行ってきた。

検討会においては、我が国における自然環境の観点から価値の高い地域をできる限り広く検討対象とした上で、世界遺産条約上の世界自然遺産の登録基準への適合性を詳細に検討するため、面積要件や人為的改変度等により、19 の詳細検討対象地域を抽出（別紙）し、当該地域について詳細な検討を行った。

（検討の結果）

詳細検討対象地域について、現時点で得られる知見、情報等に基づいて学術的見地から検討を行った結果、現段階では、以下に記述する 3 地域が、世界遺産条約に定める登録基準と完全性の条件を満たす可能性が高いものと考えられる。

しかしながら、これらの地域はそれぞれ課題もあり、直ちに世界遺産候補地として推薦できる状況にあるわけではない。

このため、今後、環境省及び林野庁等の関係省庁においては、地元自治体等関係者の意見を聴き、社会的条件も含めて更なる調整・検討を行い、その中で条件の整う見込みのついた地域については、世界自然遺産候補地として推薦されることを期待したい。

（世界自然遺産の登録基準に合致する可能性が高いと判断された地域）

知床は、流氷が育む豊かな海洋生態系と、原始性の高い陸域生態系の相互関係に特徴があり、オオワシ・オジロワシ・シマフクロウといった世界的な絶滅危惧種の重要生息地となっているという点が評価され、登録基準に合致する可能性が高いと判断されたものであるが、そうした価値を保全するためには陸域と海域を含めた統合的な管理計画の策定の必要性について、今後の課題として指摘があった。

小笠原諸島は、多くの固有種・希少種が生息・生育し、特異な島嶼生態系を形成している点が

評価され、登録基準に合致する可能性が高いと判断されたものであるが、移入種対策を早急に講じる必要があるほか、最も重要な地区の一部はいまだ十分な保護担保措置がとられていないことからそれらの解決は喫緊の検討課題であるとされた。

琉球諸島は、大陸との関係において独特な地史を有し極めて多様で固有性の高い亜熱帯生態系や珊瑚礁生態系を有している点、また優れた陸上・海中景観や絶滅危惧種の生息地となっている点が評価されるものであるが、絶滅危惧種の生息地など、重要地域の一部はいまだ十分な保護担保措置がとられていないことからそれらの解決は今後の検討課題であるとされた。

(議論が分かれた地域)

なお、以下の4地域については、検討会の結論としては集約できなかったが、世界自然遺産の登録基準に合致する可能性があるのではないかとの意見があった。

大雪山は、複数の火山帯から構成された複雑な火山地形と、広大な高山帯と高山植物の分布などが評価され、日高山脈は、特異な地質や急峻な地形と豊かな動植物相の存在が評価されている。しかし、両地域とよく似た自然環境を有するロシアのシホテ・アリン山脈が2年前に世界自然遺産に登録されているため、シホテ・アリン山脈との比較において、今後、両地域の優位性を十分証明することが第一の課題とされた。また、両地域を統合して考えるべきではないかとの意見も出されたが、両地域の地形形成過程の違いから異論もあり、保護区としては分断される両地域を如何に統合すべきかも含め、更なる検証が大きな課題であるとされた。

飯豊・朝日連峰は、(中略)

九州中央山地周辺の照葉樹林は、(中略)

(今後の取組について)

今回の検討は、世界自然遺産の候補地足り得るかという視点で行ったものではあるが、我が国の自然環境を全般的に見渡して、世界との比較という点も含めてあらためて再評価したという意味で初めてとも言える作業として、高く評価できる。

すなわち、今回の検討会では、上記に挙げた地域のみならず、詳細検討を行った19地域をはじめ、我が国には世界に誇るべき自然地域が多く存在することが浮き彫りにされた。これを機に、今後ともこのような優れた自然環境を有する地域の保全・管理の努力を継続することを強く期待したい。

また、今回の検討はあくまで世界自然遺産の登録基準に照らして行われたものであり、これに合致しないため、もしくは合致しても類似の既登録地があるために候補地になり得ないからといって、その地域の持つ顕著で普遍的な自然の価値が否定されるものでないことを、改めて強調しておきたい。

さらに、今回の検討は、現時点において、学術的見地から世界自然遺産候補地としての要件を満たす地域を検討したものであるが、なお登録基準に即した学術的観点からの国外比較等に必要な知見や情報の不足も見られたことから、そうした知見や情報の収集・分析・検討は継続すべきである。また、現段階で登録基準への合致が証明できなくても、現在持つ価値を減じて完全性が失われないように、むしろその完全性を高めるように、保全・管理の努力も継続すべきである。そうした継続的努力により、将来新たな知見や情報が得られ、登録基準や完全性の条件への適合

可能性が出てきた場合には、世界自然遺産候補地としての検討をあらためて行うべきである。

(中略)

最後に、世界遺産は推薦や登録することが唯一の目的ではなく、その地域の普遍的な価値を人類全体の遺産として将来にわたり保全していくことが目的であることを忘れてはならない。従って、推薦や登録をゴールとするのではなく、関係行政機関や地元住民などが一体となって、登録後も、長期間にわたる保護管理やモニタリングに尽力していくべきものであることを特筆しておきたい。

別 紙 <詳細検討対象地域・・・全19地域>

利尻・礼文・サロベツ原野	南アルプス
知床	祖母山・傾山・大崩山、九州中央山地と周辺山地
大雪山	阿蘇山
阿寒・屈斜路・摩周	霧島山
日高山脈	伊豆七島
早池峰山	小笠原諸島
飯豊・朝日連峰	南西諸島
奥利根・奥只見・奥日光	三陸海岸
北アルプス	山陰海岸
富士山	

■ 第2～4回検討会議事録

<第2回検討会（H15.3.25.）>

大雪山、知床、それからもう1つ、これはだれもおっしゃっていないけれども道東湿原、これは日本の中で見ればどれも非常に貴重な地域だと思うんです。しかし、世界的に見た場合に、知床は択捉・国後と全然変わりませんよね。むしろ向こうの方が自然がよく残っている。それから大雪山、これも非常に特産種が多くて、あんな大きな広い高山帯があったりしますけれども、大雪山の固有のチョウで有名なウスバキチョウなどは、北の方にはほとんどいるわけですね。日本の中でこそ大雪山にしかないから、もちろん天然記念物として、あるいは特別の自然保護地域として大事な場所だと思いますけれど、世界遺産の場合は果たしてどうだろうか。道東湿原群にしても、ロシアの沿海州へ行けばああいうふうなところは幾らでもあって、あそこで特に貴重になっているキタサンショウウオだとか、イトウだとかいうようなのはみんな向こう側にいるわけですね。そういう目で少し考えないと、日本の中の天然記念物や特別保護地域を選ぶというのは話が違ふんじゃないかというのが私の考えです。（上野委員）

私も日高山脈、知床、大雪山あたりが規模的にも大きいし、いろんな要素を含んでいるという意味で候補に挙がり得ると思います。今の上野先生の、例えば知床、大雪山のいろんな生態系が、

より北方にいけばたくさんあるというご指摘もごもっともなのですが、一方で、その南限という意味合いも、また評価の対象になり得るのではないかと。生物分布では南限、北限というのは非常に重要な境界線になるわけですが、そういう意味からすると、例えば知床とか大雪山の高山植物も南限としての価値というのも評価できるかなと思います。(大澤委員)

<第3回検討会 (H15.4.22.) >

(既に世界自然遺産になっているシホテアリンとの類似性に関する議論で) 大雪山が一番近いと思うのですが、上にいろんな高山植物があって、かなり平たいところがあってというふうな環境はありますから、そういう点では、大雪山はもちろん広い場所は広いですが、割合に似たところがあるところだろうかと思います。シホテアリンのどれだけの地域が指定されているのか、私はよく知りませんが、東側へおるとテルネーのトラの保護地区がありますし、海岸まである。ただ、海岸の様子が知床の海岸とは随分違いますから、それはまた別の問題になるかと思いますが。(上野委員)

確かに北海道の地域は比較対照になっておりまして、シホテアリンも 2001 年だったかと思っていますけれども、新しい登録でございます。シホテアリンが登録される際には、北海道の大雪山ですとか、そういったものは比較の対照に挙げられてございまして、あまり細かいところは評価していただかなかったのが、規模的な面で北海道の方はどうしても小さいといったような評価が向こうの評価審査のときには行われていたといった点を 1 つだけご紹介しておきたいと思います。(事務局)

今、日本の場合、シホテアリンに比べて面積が非常に小さくて細々しているという話があったのですが、全体の今回の検討地域を見ますと、国立公園の指定に引きずられているところが結構あります。例えば利尻・礼文・サロベツと一緒に考えるというのもそんなことだと思いますけれども、この間、北海道の自然保護協会から来たお手紙を見ますと、大雪山から日高までまとめて考える、知床と阿寒・屈斜路・摩周はつなげて考えた方がいいのではないかと、いうふうな提案がありましたけれども、シホテアリンとか、そういうのと比べてみると、この辺はまとめた方がいいような気がします。私は大雪山と日高に加えて夕張山地も一緒に入れてしまった方がいいなと思っています。(小泉委員)

夕張を含めて考えるというのは、私は大賛成です。特に動物面から見ると、夕張と日高はほとんど一連のもので差がありません。途中で集落が多少入っていますが、そう大きなものは入っていません。ただ、大雪と夕張、日高は生物面では随分違います。(上野委員)

例えば夕張、日高というのはなんとなく似たポイントを抽出できるのかもしれないのですが、それと大雪と合わせてという、全部あるようなことで、何を世界遺産のあれにするのか、日本がプレートテクトニクスと火山の標本地であるというような位置づけになって、あまり売りがないのかなという感じがします。それから、大雪と日高をくっつけるというのも、そこで何か合理的な説明をきちんとできて、どこがポイントだということを明確に提示できればいいと思うので

すけれど、生物的な面と地形・地質を考えると、一緒にしてしまうということ自体の意味があまりはつきりしない。(大澤委員)

具体的な話に移りますと、大雪と日高に関しては、哺乳類については連続性はあるのですが、昆虫相などについては違うと思います。それは大雪の方が火山に由来して、日高の方はプレートテクトニクスで隆起してできた、そういったところに理由があるとも思いますので、1つに考えて説明がうまくできるのかどうか、議論が必要かなと思います。(吉田委員)

<第4回検討会 (H15.5.26.) >

大雪山を1つとした場合の評価について申し上げます。ここに書いてありますように、1つには、地形・地質の火山現象、永久凍土や周氷河地形ということが挙げられるかと思うのですが、火山地形につきましては、さまざまなタイプがありますので完全性を満たしていると考えられます。ただ、氷河に関しましては、クライテリアの中を読みますと、明らかに氷河自体を包含していないと完全性に欠けるということが明確に書いてあるものですから、これは我が国のすべての地域について共通して言えるのですが、ここに関しては完全性を満たすということは難しいかと思います。そのほか、生態系に関しましては氷河期の遺存種がいるということですか、自然景観の広大な高山植物群落は、明らかに日本のみならず世界に誇れるセールスポイントと考えております。それぞれ一定の面積が保護区になっておりますし、残っておりますので、完全性も満たすというように考えられます。ただ、例えばナキウサギとかをとって見た場合には、固有種とは言えずに他地域でも見られますので、そういったほかとの比較において、この辺をどこまで評価できるかというのは慎重な検討が必要かと思います。国内外の既登録地等との比較に関しましては、火山性ということで着目した場合は、やはりカムチャツカ、トンガリロという環太平洋の火山帯を代表する登録地が既にございますので、そことの比較で、さらにそれを超える火山性のセールスポイントがあるかどうかというところが論点になってくるかと思います。それから、シホテアリン山脈中央部に関しまして、動植物相に着目した場合には、そことの比較になると思います。これにつきましても、総じて言うと、かなり似ているということが言えると思いますけれども、スケールにおいては大きな差があるということで、それぞれの海外の既登録地との比較においてはかなり不利な条件が見出せるということは、致し方ないかなというのが私どもの分析でございます。3番の完全性の条件に関する評価につきましては、地図をごらんになっていただくように、一定の地域が囲われていますが、大雪山に限って言えば、規制のかかる地域の割合は決して広くないというところは注意しておく必要があろうかと思います。(事務局)

日高から夕張を含めて大雪山まで一連で考えた方がいいのではないかと考えています。というのは、今までシホテアリンのようなところは規模の大きさと確かに登録されているわけですが、日本の場合は、むしろ規模の小ささというか、地質の複雑性というか、非常に箱庭的ですが、それがむしろ日本の長所ではないかと考えています。日高にしても、例えばアポイ岳のような山がありますし、夕張だと夕張岳とか(富良野)西岳とか、蛇紋岩の山、石灰岩の山がありまして、もともとの山のでき方が、プレートテクトニクスで南の方から来たのが付加体の形で次々

にくっついてきているわけです。そのために少し歩くともう地質が変わってしまう。地質が変わって、そこに非常に独特の植物があり、動物がすんでいるというような形があると思います。大雪山の場合は、そういった日高帯、カムイコタンという夕張の山をつくる地質があるのですが、その上にさらに火山が乗ったという形です。ですから、基盤でたどっていけば一連のもので、その中の一部が火山に覆われているという形になっているわけです。生物的に見れば大雪から夕張を経て日高まで、高山植物なり、高山の動物なり、あるいは高山の生態系がずっと続いて南下してきていまして、前に大澤さんがおっしゃっていたと思いますが、高山的な、ツンドラ的な、いろいろな意味の南限がここに集中して出てきていることもあると思います。私はできたら、むしろ日高と大雪ということだけではなくて、その中に夕張を加えて、全体をまとめて、名前は何と言うかよくわかりませんが、その特徴を、地質の多様性と生物の多様性がこの大陸とは違ったおいたちでできてきているというところを前面に出していった方がいいのではないかと考えております。(小泉委員)

私はこの会議の初めのころには大雪と日高とは別個に考えるべきだ、生物相は大きく違うということをお願いしたのですが、今、小泉委員がおっしゃったように、同じ基盤の上に立っている。そして、その上にでき上がっているものはひどく違うということで、やはり私も同様に、夕張を含めて、これを一連のものとするのがいいのではないかと今は考えております。(上野委員)

今のご議論を独断と偏見を交えてまとめさせていただきますと、ご指摘の生物多様性に関しては、確かに固有種が豊富にあるというのは非常に話がしやすいところではあるのですが、そういう問題点はあるにしても、生物相が非常に特異で面白いところであるという点に関してはご異論はない。それと、もう1つは、小泉委員と大澤委員との間で議論がありました森林植生としての、小泉委員は地形ということを非常に強く主張されたわけですが、特に森林植生の部分からいいますと大雪、日高というのはシホテーアリンの二番手になってしまうという弱みがあるのに対して、知床は海岸地形、半島地形、流氷というような、今まで指定されていない売りがあ。その意味では、ストラテジーとしてはこちらの方が優先するのではないかというご意見だと整理をさせていただけると思います。(岩槻座長)